



熊本市からUターンし9年目となる濱田喜幸さん。奥様の佳与子さん、3人のお子さんとの五人家族。移住してからの日々の生活を聞いてみました。



## 毎日が驚きの連続

例えば、都会でカメラをもってウロウロしていたら変質者だと通報されると思います。こちらでは、「〇〇君のお父さんがカメラ持ってる。写真撮ってる」と子どもたちが話しかけてくる。ふらっと散歩をしても多くの学生があいさつをしてくれる。確かに地域の行事が多いなどとも思いましたが、そのおかげで人と人が近く、隣の人の顔を知らないということがないです。子どもを地域のみんなで育てている雰囲気がありますね。子どもを見守ってもらえるありがたみは外からきた人じゃないと実感できないのかもしれない。

## お金では買えない環境

少し時間ができたから泳ぎに行ってみようかと車で5分。透き通る水の流れる溪谷に行くことができます。川に行ったら泳ぐなんて都会では考えられませんでした。家から歩いていける距離にホテル百選があります。ホテルの乱舞を散歩がてら見れる、家にホテルが遊びに来るなんてロマンチックですよ。食もいいですね、採れたての野菜が食べられるなんて

最高の贅沢です。都会でBBQしようと思ったら、できるまで行って場所代を払ってと一大イベントになるでしょう。こっちは庭でできるし、片付けを翌日に延ばしても誰も文句を言いません。こっちは人が当たり前と感じていることは、都会では贅沢そのものですよ、生活の中に楽しみが転がってますね。

## クリエイターとして

心配はありませんでしたか？

働く場所がないと言われますが、そこは着目点じゃないかな。田舎だからこそ生み出すこと、作り出すことができると思います。川でヤマメ釣って飲食店に売ってもいいし、やり方次第で仕事は作り出せると思います。田舎ならではの希少性であると思いますね。そもそも、何もない訳でもないし、そんなに不便とも思わないですね。実際、程よく暮らしてるわけですし、インターネット回線も町中に張ってある、コンビニもある、病院も少し車を走らせたらある、お悔やみ放送も流れるから便利(笑)。

## ライフワークの変化はありましたか？

人吉球磨の寺社仏閣の多さはすごいものがありますね。最初は興味なんて



はまだ よしゆき  
濱田 喜幸  
写真作家  
Slapstick-Photo 代表

はまだ かよこ  
濱田 佳与子  
感動演出家  
Slapstick-Photo マネージャー  
ウェディングプランナー

なかったのですが、仕事をする中で魅力に取りつかれ、新しいライフワークになりました。隣村では和紙の手漉きが残っていて写真とのコラボレーションに挑戦中です。実は、こういった素材を生かして世界進出を考えているんですよ。都会に居たら実現できなかったでしょうね。

## 全国で

移住や定住を進めていますか？

新しいものは作れますが、古いものや自然は作れません。だけど、地方にはそれがありません。毎日がせわしくない、時間がゆっくり進む。私は地域の環境や人との出会いで良い方に作風が変わり、幅も広がったと感じています。それも衣食住において、人間らしい暮らしができる毎日がここにあるからではないでしょうか。都会では音や光が常に溢れています。ここでは夜は静かで暗い、明るくなって朝が来たことを知ることができます。朝昼晩、四季を五感で感じ取ることに喜びを感じています。

ここでは何かあっても生きていける、そんな気がしますね。もうすぐ夏が来ます、家族みんなで川遊びが楽しみです。

(二〇一七年三月取材)